



(シンポジウム「ここまで来た！心臓血管外科治療の最前線」)重症心不全のFuturability

著者名	澤 芳樹
雑誌名	東京女子医科大学雑誌
巻	88
号	4
ページ	108-108
発行年	2018-08-25
URL	http://hdl.handle.net/10470/00032035

doi: 10.24488/jtwmu.88.4_108(https://doi.org/10.24488/jtwmu.88.4_108)

第84回東京女子医科大学学会総会

日 時：平成30年9月29日（土）13：10～16：00

会 場：東京女子医科大学 弥生記念講堂

総合司会（副会長）清水京子

総 会 13：15～13：30

挨拶

（会長）吉岡俊正

庶務報告

（庶務担当幹事）内田啓子

会計報告

（会計担当幹事）杉下智彦

平成30年度吉岡博人記念総合医学研究奨励賞授与式 13：30～13：40

シンポジウム「ここまで来た！心臓血管外科治療の最前線」 13：50～16：00

座長（東京女子医科大学医学部心臓血管外科学 教授・講座主任）新浪 博

1. 重症心不全の Futurability （大阪大学大学院心臓血管外科 教授）澤 芳樹
2. 植込型補助人工心臓治療の最前線 （北海道循環器病院先進医療研究所 所長）山崎健二
3. 心臓移植の贈り物 （東京女子医科大学大学院重症心不全制御学分野 教授）布田伸一
4. 低侵襲カテーテル治療の最前線—TAVIの現状と未来—
（獨協医科大学埼玉医療センター心臓血管外科 准教授）鳥飼 慶
5. ロボット支援心臓手術 （帝京大学医学部心臓血管外科 主任教授）下川智樹

シンポジウム

「ここまで来た！心臓血管外科治療の最前線」

1. 重症心不全の Futurability

（大阪大学大学院心臓血管外科）澤 芳樹

循環器医療の進歩にかかわらず、重症心不全に対する治療体系は未だ確立されていない。我々は、心臓移植、人工心臓そして再生医療の発展と普及にむけて種々の研究および臨床を推進し、あらゆる重症心不全患者に応じた普遍的な治療法を確立してきた。心臓移植は、脳死心臓移植第1例目を当科で1999年2月に実施以後、症例数がなかなか増えない中、2011年7月の脳死法案が改正された。以後、ようやく症例数は年間50例前後と増加しつつあるが、未だ解消し得ないドナー不足に対して引き続き社会的活動が重要である。補助人工心臓（LVAD）は、とくに近年の小型化された植込型LVADの各機種による治療成績の向上が著しい。心臓移植の普及が未だ難しい中、LVADが重症心不全治療の中心的役割を果たすべく、本邦初の永久使用目的（DT）の高齢者LVADを行いDT治療の治験を推進している。心筋再生治療法では、自己骨格筋芽細胞シート移植を発明するとともに、その

心筋再生治療効果を実験的に証明し、これまで50例を超える重症心不全患者に移植し、企業治験もすでに終了し実用化の段階に入っている。また現在、iPS細胞由来心筋細胞を用いた再生医療法の開発も、レギュラトリーサイエンスを構築しながら開発していく形で進んでおり、世界に先駆けて移植医療に代わる心筋再生治療の実現もそう遠くない。

このように重症心不全患者に対して、植込型LVADや心臓移植はもとより細胞を使って心機能を改善しうる心筋再生治療法を確立しつつあり、将来の展開が期待される。

2. 植込型補助人工心臓治療の最前線

（北海道循環器病院先進医療研究所）

山崎健二

米国では年間約3000例の新規植込みがあるが、補助人工心臓（LVAD）適応はBTT (bridge to transplantation) 25.7%, BTC (bridge to candidacy) 27.9%, DT (destination therapy) 45.4%と心臓移植を前提としないDT目的が最も多い治療カテゴリとなっている。適応別生存率は、BTT：1年84.7%, 2年76.7%, DT：1年76.6%,